

陽の里

発行 平成12年10月1日



社会福祉法人 新生会

総合ケアセンター

サンビレッジ

No.72

2000年 **テーマ** 共同生活における個々の役割の発見



▲グループホーム嬉楽家

痴呆老人と共に

愛知県長久手町 グループホーム嬉楽家 杉本康秀

「お姉ちゃん、そろそろ朝ご飯作ろうよ」

朝5時過ぎにこの声で嬉楽家の朝は始まります。冷蔵庫をのぞき「何を作ろう」「何でもいいよ。食べれば」「じゃあ、じゃがいもとタマネギを切って」おぼつかない手つきながらも、昔とった杵柄か手を切る寸前で包丁が止まる。お年寄りは何食わぬ顔。いままでお年寄りが包丁で手を切ったことは1度もないことから考えれば、安全といえば安全かもしれないが、職員は冷や汗もの。職員で調理をしてみれば何も起こらないだろうが、グループホームでは、メンバーが共同で暮らしを作りあっている。お年寄りとは冗談を言い合いながら、ぼつぼつと食事が出来上がってくる。みんな（定員7名）そろったところでご飯を食べる。「おいしいね」「ありがとう」そんなことを言いながら食事を終え、後片付けに入る。何気ない会話、一般家庭であればどこにもある当たり前の生活が、新鮮な息吹と共にグループホームという家庭に在る。

快適と安心のグループホーム

木もれびの家 チーフ 青木好美

介護保険がスタートして四ヶ月が過ぎた今、居宅サービスの一環として、グループホームが各所で建設されつつあります。総合ケアセンターサンビレッジでも、十一月半ばに”木もれびの家“がオープン運びとなりました。大きな榉の木の下で、緑の芝生に腰掛けて、優しい日差しを受けながら、のんびりと一日を過ごします。このグループホームとは、



少人数の方々が障害を持つても”我が家と同じ様な生活が続けたい“との思いを尊重し、家庭的な雰囲気の中で、お年寄りスタッフと共に暮らすものです。お年寄りは、長い人生から様々な経験や知恵を持っていますが、加齢に伴う心身の状態から、今までの様に思うように家事が出来なくなったり、人との関係を思い出せなくなったりし、それが不安や混乱を招きます。それをその方の状態に合わせて、混乱を避け、生活の継続をより可能に近づける為、一人ひとりが個室へ馴染みの家具や飾り物、写真等を持ち込んで、忘れた自分を思い出せる環境を作ったり、本人のリズムとペースで暮らしが継続できるように、スタッフが仲間としてサポート



◀木もれびの家 (改修前)

ートします。

例えば、お金の計算を忘れても、家事・炊事・洗濯・畑仕事などでの関心が少し残っていたり、どこが家かを思い出せなくても、顔が洗え、おしゃべりが出来る事があります。又、身体的・精神的にそれらが出来ない場合は、料理の味見や作り方の知恵等、一緒に参加する

方法を検討し、出来る事に目を向け、日常生活の回復を図ったり、持続へとつないでいきます。そしてそれが、利用者自らが主体性を持って生活の役割を担う事となり、生活への意欲と自信が回復し、「お互いそれぞれでの生活の中で、気楽に、安気に、助け合って暮らす」目的が少しずつ実現していくことになると思います。

グループホーム”木もれびの家“は、十一月十八日に開設を予定しており、定員は六名となっております。是非一度、お立ち寄りください。ご一緒にお茶でもどうですか。



第四回「介護の質の向上を目指して」

その人らしい生活を

ユニットケア

現場からのメッセージ

ホームの暮らしが住みやすいと感じられる「生活の質」とは何で見ることが出来るのでしょうか。建物の様に目に見える所はよく分かりますが「介護の質」の様に目に見えにくい所もあります。サンビレッジは開苑当初から利用者の立場に立つ事を基本理念として「介護の質」の向上を目指し、取り組んできました。しかしまだまだ未完成な所を認識しております。今回第四回として、介護保険導入のこの二〇〇年を機に現在取り組んでおります「介護の質」を紹介していきたいと思えます。

ユニットケアへの取り組み

—— ユニットケアがもたらすものとは ——

ヘルパー 田中広美

特養とは、「生活の場」である。見当識障害や記憶障害の著しい痴呆の利用者にとって、衣食住のすべてが提供される施設での生活は、生活しているという実感が得られにくく、様々な不適応行動を取られる。

そういった利用者に対し、今まで畑仕事や夕食調理等、

役割を担って頂くことで、不適応行動の軽減やQOL(生活の質)の向上を図ってきた。今年度、このような活動をより具現化、継続化していく為にユニットケアを始めた。

ユニットケアでは、利用者者をいくつかのグループに分けることで小規模化した

ケアに当たる。利用者、スタッフが共に生活していくことで、馴染みのある擬似家族のような関係、家庭的な雰囲気を作り、利用者の残存能力を見出し、それを活用していけるようなケアを目指す。

その具体的な試みとして対象者4名によるユニットを作り、居室の一つをグループの部屋とした。生活歴等をふまえ、縫い物や調理、園芸、読経等の活動をしたり、時には和気合いあいとくつろいだり、一日をゆったり過ごす。

食事時には、職員も共に食事を楽しむ。「いただきます」「お金はいくらですか」「お金は？」と躊躇しながら、食事を摂る場面が見られた利用者も、自分達でご飯をよそい、お茶を入れ、それぞれの席に着く。「いただきます」と声を掛け合い食事をすする。おそらくそれは、長い間、各家庭でそうしてきたであ

ろう光景である。

この試みにより、施設の中においても、そんな当たり前の生活を継続することが出来る。私達が求めている理想の形である。

先日、棟内花火大会の時、人形を抱えて参加した利用者一人は、同じように赤ちゃんを抱いていた職員の家族らのもとに駆け寄り、目を輝かせ、話に加わっていた。その表情はまさに母親の顔そのものであった。

かつて彼女達も家事、家業をこなしながら、子供を産み育て、母として、妻として、嫁として、また地域の一員としてその役割を担い、忙しい日々を過ごしてきたであろう。

家庭的な生活の再現により、利用者の新たな一面を見出すことで、さらなるケアへと展開していきたい。

私達のユニットケアは、まだ始まったばかりである。

私とボランテイア

私がクッキングのボランテイアとしてお邪魔するようになって、約一年半が経ちました。月二回の約束で始めたのですが、なかなか順調にはいきませんでした。でも、職員の方達の応援と参加してくださるお年寄りの笑顔に励まされ、今日の日に至っています。

初めてのクッキングの日、お年寄りと一緒に上手に作れるかどうか心配でしたが、皆さんの明るく生き生きとした表情に出会い、安心して取り組みました。私の話を聞きながら、次々と手順よく作っていかれる様子を見てみると、つい八十歳以上の高齢の方だということをお忘れそうになりました。特にホットケーキを焼く手付きは、板についていました。でも何しろ八十人分ですから、

立木政子

中には失敗もあり、大きさがまちまちだったり、焦げ目がついていたりしましたが、味には変わりがなく、食べていただいた方には喜んでもらえました。一緒に作ってくださった方達とホットケーキを食べながら、四方山話に花が咲き、すっかりうちとけることができ、あつという間に時間が経ち、次回の再会を約束し、心満たされて帰りました。

クッキングを通して、お年寄りから明るい笑顔・感謝の言葉・人の支えになっっているという満足感、共に歩む姿勢等の贈り物ももらいました。今後もお年寄りと共に歩んでいきたいと思えます。



あじさいの家

パラメディカルチーフ
神谷明子

今年の六月下旬、サンビレッジ新生苑の一角に可愛い「あじさいの家」がオープンしました。四月にはチューリップ、五月にはバラ・藤、夏は真っ赤なサルビア、秋は丸く刈り込んだ菊の花など、四季折々の花が咲きそろう中庭を通り抜けると、お地藏さんのその先に和風の平屋があります。自動扉を開け家の中に入ると、床がバリアフリーになっており、障害のある方にも使いやすい調理台が設置された台所、グループで作業が出来る居間、手すりを使って少しでも自立排泄を可能にするトイレと、色々細かい所にも気を配られた造りになっています。

作業療法士が考案した階段を上がると和室があり、そこからは手入れされた日本庭園を眺めることができ、緑豊かな中に、その家はなかなか落ち着きのある佇まいを見せています。小さい家ながら、すでに様々な活躍をはじめられています。

みんなでワイワイにぎやかに過ごす事が好きな方には、大きなヒ

マワリホールは楽しい場ですが、全ての方がそうとは限りません。お互いの顔を確認し、おしゃべりを楽しむには、あじさいの家は本当にちょうどよい大きさです。昔、親しんだ縄編みや裁縫、お料理を仲間と一緒にすると、話にも一層花が咲き、帰る時を忘れてしまうこともあります。

皆さんも是非一度あじさいの家を覗いてみてください。そこには、忘れていた時をかすかに思い出したのか、裁縫するその手先に自信を取り戻したAさんの穏やかに過ごされる姿が見られることと思います。

2001年カレンダー
予約受付中

●販売価格

一部 1,500円

●お問い合わせ・予約受付先
サンビレッジ新生苑

●TEL

0585・45・5545

●FAX

0585・45・7131

